Report
報 告

哀傷歌における『源氏物語』摂取
―『続詞花和歌集』についての考察―

WAKA of elegy and quotations from “The Tale of Genji”
—About “The Shoku-Shika Wakashu”—

君嶋 亜紀[1]
[1]大妻女子大学文学部日本文学科

Aki Kimishima[1]
[1]Department of Japanese Language and Literature, Faculty of Language and Literature, Otsuma Women’s University
12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan 102-8357

キーワード：和歌，哀傷，源氏物語
Key words：WAKA, Elegy, The Tale of Genji

抄録

哀傷歌は人の死を悼む歌である．報告者は中世和歌のうち，院政期から南北朝期にかけて詠まれた哀傷歌を対象として，『源氏物語』摂取がみられる歌を収集し，その表現意識や方法の分析を行ってきた．そのなかから本報告では，院政期に成立した『続詞花和歌集』哀傷部の『源氏物語』摂取を取り上げ，摂取方法や対象，配列や撰集意図について検討した結果を報告する．

哀傷歌における『源氏物語』摂取が最も盛んに行われ，研究史上最も注目されてきたのは新古今時代である．本報告では『続詞花和歌集』を，哀傷部に『源氏物語』摂取の歌が意図的に配された先駆例と位置づけ，新古今前夜の様相の一端を明らかにしたい．

１．はじめに

中世和歌のうち，院政期から南北朝期にかけて詠まれた哀傷歌を対象として，『源氏物語』摂取がみられる歌を収集し，摂取対象や方法等の分析を行ってきた．

『源氏物語』は中世において，王朝がすでに過去のものとなったという自覚のもと，その王朝を憧憬し，再現するための拠り所として，和歌や散文等多くの作品に摂取され，宮廷行事など現実社会の場面でもふまえられていった．なかでも哀傷歌は，中世初頭の院政期から新古今時代にかけて『源氏物語』摂取の普及していった場のひとつである．稿者は，

１）古代から中世への転換期にあたる院政期から新古今時代にかけての哀傷歌
２）『新古今和歌集』に撰入された哀傷歌とその背景にある撰歌・詠歌意図
３）新古今時代以後，とくに十三代集と『新葉和歌集』の哀傷歌

を対象に，『源氏物語』摂取の用例を収集し，摂取対象や方法，表現意識について分析してきた．本稿では，このうち１）の前半にあたる新古今前夜の例として『続詞花和歌集』を取り上げ，『源氏物語』摂取をめぐる視点や方法について具体的に報告する．

院政期に成立した『続詞花和歌集』は，「勅撰集」を想定した哀傷部における『源氏物語』摂取の早い例と位置づけられる．同集は『源氏物語』摂取という観点からは従来あまり注目されてこなかったものだが，摂取の方法や対象，配列や撰集意図を検討し，『源氏物語』摂取の先駆例として新たな視点を提示したい．

２．『続詞花和歌集』の試み

『源氏物語』は，その物語展開の一つの軸である愛する女性たちの喪失というテーマと連動して，早い段階から哀傷歌に取り入れられていった．すでに『栄花物語』の和歌に『源氏物語』の哀傷歌に由来する歌語や情景が見えることが指摘されており[1]，院政期になると，物語中の歌語を明示的

に切り取ったり，物語のある場面を髣髴させるような意図的な摂取が見られるようになる．ここでは『続詞花和歌集』（以下，歌集名の「和歌」は省略する．他集も同）哀傷部を取り上げ，『源氏物語』摂取という表現行為をめぐる契機や意図，機能について考えてみたい．

藤原清輔（1104～77）撰の『続詞花集』（永万元1165年頃の成立）哀傷部には，『源氏物語』摂取が散見する．同集は二条天皇の下命により勅撰を目指して清書しているうちに天皇の崩御に遭い奏覧には至らなかったとされる[2]．しかし，その部立は『古今集』に準じる二十巻構成であり，入集歌がのちの『千載集』と162首，『新古今集』と80首共通することから，勅撰集的な撰歌基準をもっていたと考えられている[3]．つまり同集の『源氏物語』摂取は，「勅撰集」的媒体の哀傷部にまとまって見える早い例と位置づけられよう．ここでは新古今時代の例と比べ，これまであまり注目されてこなかった『続詞花集』哀傷部の『源氏物語』摂取について，管見で見出した例を挙げ，通観してみたい．軸となるのは次の歌である．

近衛院のみわざのよ，蔵人にて侍りしことを思ひて，まゐりてをがみたてまつりて帰るとて，ものに書きてみささぎのかたはらに立てける　　　　平実重

思ひきや虫のねしげき浅茅生に君を見すててかへるべしとは　　　　(396) [4]

近衛天皇の葬送に参列した折の平実重の歌で，傍線部は『源氏物語』桐壷巻の，桐壷更衣を亡くした母君の歌「いとどしく虫の音しげき浅茅生に露おきそふる雲の上人」[5]から摂取している[6]．近衛天皇は久寿二年（1155）7月23日，17歳で早世した．秋のことであり，その御陵を形容した「虫のねしげき浅茅生」は実景でもあったのだろう．また「君を見すてて」という言い回しにはいとけない幼帝への視線が感じられる．秋の情景，惜しまれて早世したという桐壷更衣との共通項や残された少年源氏の面影が『源氏物語』の文脈を喚起したものと考える．実重は，近衛天皇の時代に述懐の歌によって蔵人に昇進できたという次のような逸話を残している．

蔵人にならぬ事を歎きて年ごろ賀茂社にまうで侍けるを，二千三百度にも余り侍りける時，貴布禰の社にまうでて柱に書き付け侍ける　　　　平実重

今までになど沈むらん貴舟川かばかり早き神を頼むに

かくてのちなんほどなく蔵人になり侍にける，近衛院の御時なり

（『千載集』神祇・1270）[7]

実重が蔵人になったのは，近衛天皇の久安5年（1149）6月のことである．実重の「近衛天皇の蔵人」という立場への思い入れには格別なものがあったと思われる．

また，近衛天皇崩御について語る『今鏡』すべらぎの下・第三「虫の音」は，近衛天皇が幼少時から和歌に優れていたと述べ，「おほく詠ませ給ひける中に，世を心細くや思し召しけむ」として，天皇の次の歌を載せる．

虫の音のよわるのみかは過ぐる秋を惜しむ我が身ぞまづ消えぬべき[8]

この歌は同時代の私撰集『後葉集』（久寿2年〈1155〉11月～3年正月の成立）には「題不知」として見えるが，のちの『玉葉集』では「御心地例ならずおはしましける秋よませ給ひける」（雑四・2313）という詞書を付して採られている．竹鼻績氏は諸史料により，近衛天皇が不例であったのは仁平3年（1153）秋のことで，この歌は同年の詠，天皇15歳の作と推定している．『今鏡』は続けて，天皇御葬送の夜の詠として，実重の「思ひきや」詠を載せる．実重の歌は2年前の天皇の「虫の音の」詠を意識したものともとれよう．亡き帝が生前，自身の行末を重ねた弱りゆく「虫の音」を思い，いま葬送の地で盛んに鳴く「虫の音」に帝の面影を重ねて，その歌語を詠み込み唱和しているのではないだろうか．

『続詞花集』哀傷部では，この実重の歌の前後にも『源氏物語』に見える語が散りばめられている．

をさなき子のうせにけるが植ゑおきたりける菖蒲を見侍りて　　賀陽院木綿四手

あやめ草たれしのべとか植ゑおきてよもぎのもとの露と消えけむ　　　　(393)

第四句は須磨明石から帰京した光源氏が久々に末摘花の邸を訪ねた折の歌「たづねてもわれこそとはめ道もなく深きよもぎのもとのこころを」（蓬生巻）に見える語である．

修理かみ忠能身まかりてのち，秋の夕思ひ出づることや侍りけん，よみ侍りける
藤原長成朝臣母

いにしへをこふる涙もひまぞなき露おきそふる秋の夕ぐれ　　　　(407)

忠能は保元 3 年（1158）3 月没，作者長成母は忠能室である．「露おきそふる」の語は，実重 396 詠のところで引用した桐壺更衣の母君の歌「いとどしく虫の音しげき浅茅生に露おきそふる雲の上人」に見える．この語は『源氏物語』以前，早く『後撰集』秋中に収められた近江更衣と醍醐天皇の贈答歌に，

母の服にて，里に侍りけるに，先帝の御文たまへりける御返ごとに　　近江更衣
五月雨に濡れにし袖にいとどしく露おきそふる秋のわびしさ　　（277）
御返し　　延喜御製
〈稿者注：醍醐天皇〉
おほかたも秋はわびしき時なれど露けかるらん袖をしぞ思　　（278）[9]

と見えるもので，詠歌状況の類似性から，桐壺更衣の母君の歌の「露おきそふる」はこの近江更衣の歌の語を転用したものと考えられている[10]．桐壺帝には醍醐天皇の面影が投影されていることから，『源氏物語』の源泉を考える際，注目される例であり，やはり『源氏物語』を髣髴させる語と捉えられよう．ただし,『続詞花集』407 の初二句は，藤原公任が亡父頼忠を哀悼した歌，

いにしへを恋ふる涙にくらされておぼろにみゆる秋の夜の月　（『詞花集』雑下・392）[11]

によっており，この 407 詠単独では『源氏物語』摂取とは言い切れない．公任詠と後撰集歌，二首の織りなす情感に身を委ねて，人に物思いをさせるという秋の夕に募る故人への思いを詠んだものとも捉えられるが，『続詞花集』哀傷部では，実重らの歌に引かれて『源氏物語』の面影を強めると考える．

続く 408 詠は，

播磨守顕保朝臣身まかりにけるとき，かの朝臣の住みける女のもとにつかはされける　　新院御歌
〈稿者注：崇徳院〉
聞くにだに露ところせきふるさとの浅茅がうへを思ひこそやれ　　（408）

藤原顕保が没した折，残された妻のもとに崇徳院が贈った歌である．「露」しげき宿の情景と下句の「浅茅がうへを思ひこそやれ」という言い回しが，桐壺帝が更衣の死後，その母君に遣わした歌「宮城野の露吹きむすぶ風の音に小萩がもとを思ひこそやれ」（桐壺巻）と通い合う．帝王が亡き人を悼む宿を弔問するという状況にも類似性がある．この桐壺帝の歌は，帝が靫負命婦を更衣母君のもとに弔問に遣わした際，命婦に託した帝の手紙に記されていたものだが，続く場面で命婦の歌「鈴虫の声のかぎりを尽くしても長き夜あかずふる涙かな」に対して更衣母君が返した歌が，前掲の「いとどしく虫の音しげき浅茅生に露おきそふる雲の上人」である．この歌に見える「露おきそふる」の語を詠みこんだ 407 と，同じ場面の桐壺帝の歌を想起させる 408 は，桐壺巻の情景を共有しあい呼応するように並べられているのではないだろうか．

なお，『続詞花集』哀傷・420，421 は，崇徳院の生母・待賢門院璋子の没後，四十九日の法事が済んで人々がそれぞれ帰って行った際，崇徳院が待賢門院の女房であった兵衛に贈った歌と兵衛の返歌だが，鈴木徳男氏は，この二首が，『源氏物語』賢木巻で「桐壺院の四十九日が終わって，人々がちりぢりに去って行く有様を描くところに類似する」と指摘している[12]．また，他に，亡き人の形見の雲を探して空を眺めていると詠む 413 の藤原頼孝詠の視線も，夕顔を哀傷する光源氏の歌「見し人の煙を雲とながむれば夕の空もむつましきかな」（夕顔巻）を想起させる．

以上，『続詞花集』哀傷部の例を見てきた．実重の 396 詠以外の例は，『源氏物語』以外にも出典の見える語も多く，実重詠ほど明らかな『源氏物語』摂取ではない[13]．しかしこうして並べてみると，『源氏物語』を髣髴させる歌語が散りばめられていると捉えられないだろうか．『続詞花集』の撰者清輔が，実重の歌を軸として，『源氏物語』を想起させる語句や情景を意図的に集めた可能性を考えてみたい．その中心となっているのは桐壺巻の情景であり，『続詞花集』哀傷部には，更衣の死を悼む桐壺巻を髣髴とさせるような情感が揺曳していると捉えられる．

勅撰集哀傷部における『源氏物語』摂取は，用例の質量において『新古今集』の存在が大きい．とくに注目されてきたのは，藤原俊成の妻美福門院加賀の死を悼む俊成と息定家の詠歌群（『長秋草』172～192，『新古今集』哀傷・788，796 等），藤原良経室の死を悼む俊成と良経の贈答歌（『新古今集』哀傷・828～829），後鳥羽院の寵姫・女房尾張の死を悼む後鳥羽院と慈円の詠歌群（『新古今集』801～803，『源家長日記』等）であり，先行研究も数多く蓄積されている．本稿では，そうした新古今時代の隆盛以前に，「勅撰集」哀傷部を想定

して『源氏物語』摂取を意図的に複数散りばめようとした早い例が『続詞花集』に見出せることを指摘しておきたい. また,『続詞花集』哀傷部の歌々から浮かび上がってくる桐壺巻の情景は——更衣の死を悼むというその巻の内容から必然ともいえるが——のちに上記の新古今時代以降の哀傷歌においてさまざまに摂取され展開されていくもので,そうした桐壺巻摂取の早い例としても注目されよう.

３．おわりに

以上,『続古今集』哀傷部を取り上げ，桐壺巻を中心に，状況の類似性を基盤として『源氏物語』を想起し摂取する方法を分析した．さらにそうした『源氏物語』の歌語や情景の摂取がみられる歌を複数配列することで，物語の哀傷風景を髣髴させようとする撰者の意図を指摘した．のちの新古今時代の哀傷歌における『源氏物語』摂取の隆盛に至る道筋を照射するものとして，新古今前夜の——いわば哀傷歌における『源氏物語』摂取の普及過程の——一端を明らかにできたのではないかと思う. 以上をもって, 中世の哀傷歌における『源氏物語』摂取研究の中間報告としたい.

付記

本研究は大妻女子大学戦略的個人研究費（S2614）の助成を受けたものです.

引用文献

[1] 清水婦久子,「古今集から物語へ，物語から新古今集へ——哀傷歌の系譜——」，浅田徹ほか編，『古今集　新古今集の方法』，笠間書院，2004，p.119-140.
[2] 鈴木徳男,「続詞花和歌集」の項,『和歌文学大辞典』編集委員会編,『和歌文学大辞典』，古典ライブラリー，2014，p.605.
[3] 松野陽一，「続詞花和歌集」の項，犬養廉ほか編，『和歌大辞典』，明治書院，1986，p.505-506.
[4] 鈴木徳男，『続詞花和歌集新注』上，青簡舎，2010，p.322-323. 以下，『続詞花集』の引用は同書による（漢字は適宜当てた）.
[5] 阿部秋生ほか，新編日本古典文学全集『源氏物語①』，小学館，1994，p.32. 以下，『源氏物語』の引用は同書による.
[6] 河合一也,「『続詞花集』哀傷部の配列構成について」,『語文（日大)』，1993.6，86，p.13-26，および, 鈴木徳男注[4]書が指摘する. なお鈴木氏は,桐壺巻の場面の背景にある長恨歌にも言及している.
[7] 片野達郎ほか，新日本古典文学大系『千載和歌集』，岩波書店，1993，p.385-386.
[8] 竹鼻績,『今鏡（上）全訳注』, 講談社学術文庫,1984，p.443-450. 以下，竹鼻氏の論の引用は同書による.
[9] 片桐洋一，新日本古典文学大系『後撰和歌集』,岩波書店，1990，p.85.
[10] 寺本直彦，『源氏物語受容史論考』続編，風間書房，1983，p.419.
[11] 工藤重矩ほか，新日本古典文学大系『金葉和歌集　詞花和歌集』，岩波書店，1989，p.343.
[12] 鈴木徳男注[4]書.
[13] 鈴木徳男注[4]書で『源氏物語』摂取に言及しているのは，407 と 420・421 のみである.

Abstract

"Aisho-ka" is an Elegy, a kind of WAKA (an old Japanese poem which consists of 31 syllables) mouring the dead. I have collected and analyzed numerous WAKA of Elegy which include expressions or scenes from "The Tale of Genji". Those WAKA of Elegy were composed during the latter half of the 12th to 14th century (the Japanese medieval period). In my report, I would like to express my views on "The Shoku-Shika Wakashu" which was compiled around 1165. So I have chosen these quotations, analyzed the way they've been used, and provided my interpretation of the compiler's intentions.

Many consider the quotations from "The Tale of Genji", "The Shin-Kokin Wakashu" as a remarkable piece. However, I think "The Shoku-Shika Wakashu" deserves greater attention, it precedes "The Shin-Kokin Wakashu".

（受付日：2015 年 8 月 8 日，受理日：2015 年 8 月 31 日）

君嶋　亜紀（きみしま　あき）
現職：大妻女子大学文学部日本文学科専任講師

東京大学大学院人文社会系研究科博士課程単位取得退学．博士（文学）．
専門は日本中世文学，和歌文学．現在は新古今時代と南北朝期という二つの転換期を軸に，和歌の表現や歌集の構想について研究している．
主な著書：和歌文学大系 44『新葉和歌集』（共著，明治書院，2014）